

大川原脩平

大川原脩平は舞踏家、仮面屋。若手研究員として入り、二年目から事務局。三年目は佐藤（成）と二人体制で事務局長見習い。つくりかた研究所とは何か、を問いつつける。

つくりかた研究所という我々

アートプロジェクトというものは、どのようなかたちで行われるにせよ、あるひとまとまりのものであるという以上の明確な構造をもたない（はずである）。それゆえに、多くのプロジェクトはある一定の期間ののち、本書のようなアーカイブの機能をもった成果物としてまとめられることが一般的である。しかしながら、本書が一般的なそれと少し異なる点は、プロジェクトの参加者がそれぞれの視点で、それぞれの興味に従って自らの活動を記録しようとしている点である。我々があえてこうしたかたちでアートプロジェクトを記録しようとしているのは、普通ならば切り取られてしまう失敗、あるいは「ゆらぎ」や「ぶれ」といったものも含めて記録に残しておくことの必要性を強く感じているからにはかならない。我々はあえて、一見して意味のないと思えるようなところまで含めて、赤裸々に記述している（はずである）。そのため、ほかのアートプロジェクトの成果物と比べてみ

ると、失敗ばかりに見えるかもしれないし、悩みや問題点ばかりに思える。むしろ、何の成果も残していないようにさえ見えるかもしれない。だからここでちよっとだけ理念をねじ曲げて、あえてのあえて、きわめて乱暴に「我々」という一人称で研究所の記録を書いてみようと思う。「我々」が書けばこそ、つくりかた研究所という複雑怪奇な活動のなかにあるわかりにくい成果たちを、明快に記述できるはずだからだ。そもそもこうしたねじ曲がりかたこそが、つくりかた研究所の最初のスタートラインであったはずなのだから。本稿を進めていくにあたっては、二つの大きな「問題」にしたがって話をしていく。これらの「問題」は、つくりかた研究所と三年間かけて関わってきた上で、もっとも重要だと思われる事柄で成り立っている。そして興味深いことに、そのもっとも重要だと思われる事柄たちのほとんどは、ある意味ではほとんどどうでもいい問題でもある。

つくりかた研究所の問題

つくりかた研究所の行ってきた大きな活動のひとつは、端的に言えば、「問題にすらないようなどうでもいい問題」について「だからだと考え続ける」ことである。そのことについて、創設者の長島は次のように書いている。

「つくりかたから考える」。ただしこの問題意識は、まっ先に自分たち自身に向かつてきました。つまり、この研究所自体をどう運営し、進めていくのか、まずそのことから考える必要がでてきたのです。その結果、「決め方をどう決める?」「打ち合わせの仕方を打ち合わせる?」といった具合に、物事をいちいち手前から考え直す、〈逆進〉とでも呼ぶべき現象が起こり始めました……

(「だれかのみため 展示と実演」チラシ)

この時点で、大の大人が公的なお金を使ってやっているとは到底思えない事業であるが、こうした問題について、本当に三年間かけて考え続けてきたのだから、現代におけるアートの問題が相当にねじれておかしな方向に行っていることは、アートプロジェクトに明るくない方でも想像がつくだろう。こういったことを考えること自体がやはり研究所の課題なのであって、この問題は巡り巡ってあらゆる社会問題などと結びついていく(気がする)のである。

研究所は、三年間ずっと、つねにこうした「問題にすらなりえないようなどうでもいい問題」とともにあつた。決めかたをいつも決めかねていたし、とりあえず集まってきたから、これから話す内容を何にするかといったようなことをずっと話していた。これらの活動(と呼んでいいかはいまだにわからない)を報告したとき、三菱UFJリサーチ&コンサルティング

の太下義之氏は「古代ギリシア人が民主主義について議論をしているようだ」と言った。うまい例えをするものだと思つたのだが、確かに、我々は民主主義とは何か、一度も理解したことがないのではないか。もちろん知識として知ってはいるものの、我々のなかの誰が検証して発案したというわけでもなく、我々にとって民主主義というものは生まれたとときからそこにあつたのである。そうしてあつた民主主義というものを、我々はなんとなく享受しているにすぎない。そう考えると、研究所の活動は民主主義の再検討とも言える。もちろん、たんなる思考実験とも言えるし、ごっこ遊びとすることもできる。具体的な意味のある話し合いと、ごっこ遊びの狭間をつねに揺れ動いているなかで、研究所は危うく成立していた。

民主主義の再検討をした結果、結論として何が生まれたかと問われれば、おそらくそこにはとくに何もなかった。あるいは結論がなかったと言つたほうが正しいのかもしれない。しかし、結論がなくても物事は進んでいくし、何かが決まったような気にもなる。人が数人集まれば話もするし、ものすごく良いアイディアが浮かぶ場合もあれば、そうでないときもある。しかもそれは、議論をしようとか、崇高な問題意識があるとか、そういうこととは一切関係なく起こるのである。ただしそういうことがおぼろげにわかつてきたのは、もう少し後になってからのことだった。

どうでもいい問題は どうでもいい問題

何度も言うが、つくりかた研究所での三年間は、基本的に「問題にすらなりえないようなどうでもいい問題」について「だからだと考え続けて」きた。ところが、こうした問題について「だからだと考え続ける」ためには、やはりこうした問題がどうでもいい問題だとは認識していないという必要があるらしい。ふと気づくと、こうしたどうでもいい問題について、やはりどうでもいいと思った研究員が、すぐに先を急ごうとする事態が起き始めた。ただし、先を急ごうとしても、急ぐ先がないのだから結局のところどうしようもなく、謎のフラストレーションがたまっていた。一方で、どうでもいい問題をどうでもいいと思っていない研究員ももちろんなかにはいた。そうした層は先を急ぐことに違和感をおぼえ、やはりフラストレーションがたまっていたらしい。これこそが「どうでもいい問題は どうでもいい問題」である。「どうでもいい問題は どうでもいい問題」はしかし、問題がどうでもいい場合に限らず起こることであろう。そもそもこの種のいら立ち、問題がどうでもいいということよりも、なんら生産性のなさそうな会議に出席しなければならぬ自分の境遇への呪いや、自分のやるべき役割が明確でないことに対する不満であったりするように思われる。ただしそうしたフラストレーションは、なんとなく微妙な空気として流れるものの、大きな感情の発露として外へ表されることはほとんどなかった。こ



これは研究員たちの性質によったのかもしれないが、いずれにしても、こうしたぶつかり合
いのような不満やいら立ちと、なんとなく感覚的に進行していくアートプロジェクトの
ような場がまじりあった結果、わかりやすい成果（あるいは失敗）としての「自治」や「研
究室体制」といった概念がなぜだか生まれてきたのである。

こうした出来事は、二つのことを意味している。ひとつは、人が集まれば何か話をする
ことがあるということ。もうひとつは、何もしていなかったり、やることがないと感じる
と、人は何かをしたいと思うのだということである。ここ数年世間を賑わせている「ブラッ
ク労働」と呼ばれる類の働きかたに比べると、こうした「何もすることがない」「役割がない」
という状態は、逆の意味で異常である（もちろん研究所のやってきたことが「労働」また
は「活動」なのかどうかについては議論をする必要があるだろう）。集まる必要があるの
に、やることや話し合うことがないので、言ってしまうえば極端な話、来なくてもよいの
である。実際に研究所の活動は、来なくてもとがめられるようなことは一切なかった（事実、
研究所の活動の半ば以降、活動に一切来なくなった研究員もいる）。これは「ブラック労働」
とは別の意味で、かなり厳しい状況である。「研究員」という名前だけが与えられ、曖昧
なアイデンティティのなかで「何もしなくてもよいが、何かをしてもよい」という自由の
沼に放り出される。こうした状況が、まったく三年間続いたのがつくりかた研究所であっ

た。いやむしろ、こうした状況をつくるためにこそ尽力していたといっても過言ではない。
そうでなければ、やはりアートプロジェクトはたんなる「労働」の枠のうちに貶められて
しまうだろうから。実際、我々はあらゆるものをつくりかたを知っているし、つくってい
る人は確かにいる。あらゆるリソースが共有されている社会のなかで、何かをつくっても
いいし、つくらなくてもいいと面と向かって言われることほど、大変なことはないだろう。
つくらなくてもいいのだという現実は、つくっていることの否定でもある。そうした現実
を突きつけられてもなおつくっている人、あるいはつくらないことを選択できた者だけが、
つくりかた研究所の入口に立つことができたのだと言えよう。「どうでもいい問題はどう
でもいい問題」は、その意味で、つくりかた研究所への関わりを試すためのプロセスであっ
たし、一方で、研究所という建築の大黒柱でもあった。

だからだと考え続けるために

ところで、つくりかた研究所にしたって、どうしても決めなければならない問題という
ものはある。アートプロジェクトとして進んでいる以上、報告をしたり、事務作業的なこ
とはついてまわるし、誰かが決断を下さなければならぬことは必ずある。そういうとき、
我々は「じゃあ、○日あたりにだから話しましようか」と言う。そうして実際に、早い

ときは朝の一〇時ごろから集まって、長いときは八時間以上にわたってだらだらと話すのである。集まってくる人数はばらばらで、ただ様子を見に来たり、途中でやめて来たり、すぐに帰ったりする者などがある。もちろんこの間、肝心の議題について話している時間はほとんどない。研究所の人はみなシャイで、たいがい「最近どうですか」といった当たり障りのない会話からスタートする。こういう、初対面のお見合いみたいな空気は、三年かかって薄れてもついに消えることはなかった。それから誰ともなく、だんだん「このあいだ、〇〇の公演を見たんですよ」などという話が始まって、へえ、とか、なるほど、とか言いながら、なんとなく現在の問題意識と重なったりして、本来の議題によりやくたり着いたりする。たどり着いたと思ったら、まったく別の話で盛り上がったりする。そうこうしているうちに、もうそろそろ帰ろうかという段になって、ふっとアイディアが降ってきたりする（もちろん、来なかったりもする）。アイディアが降ってきたときはしめたものだし、来なかったらたんに残念である。しかし、だいたいの場合は何か降ってきて、我々を助けてくれる。そういった物事の決めかたが、研究所全体に浸透していたかどうかはわからないが、わりあいこんなかたちで何かが決まっていたように思う。

この何かの決めかたの構造は、意外にも別の場所でも発見することができる。たとえば、西洋でいうとインプロ（即興演劇）のシアターゲームなどに似た構造がある。「同じ理由で出るゲーム」とか呼ばれているそれは、アイディアの打ち合わせをせずに、複数の人間が同じ理由で舞台の外へ出ることができたら成功というゲームである。舞台の上で何となく立っていると、誰かが「ここは暑いね」などと言ってみんな外へ出たりする。このゲームのポイントはシンプルで、そこにあるアイディアを見逃さないことである。暑いねというアイディアが出るときなどは、実際に暑いのである。どんな話し合いもそんなものではないだろうか。アイディアや解決策なんていうものは、実は最初からそこにあるものなのかもしれない。

話を戻すが、世間ではだらだらと長いだけの会議が非難されている昨今、研究所のこうした決めかたは一見非常に非効率的に思える（し、実際に非効率的だ）。しかし大事なものは、これは最初から会議ではなく、「だらだら話すため」に集まったのだということである。そのため問題は、決まったり、決まらなかつたりするのだが、それを責めてはいけないうし、責めるだけの正当な理由もない。そして、本当に大切なことは絶対に決まるのである。むしろ決まらなそうなときは問題が大きすぎたり、あまりに些細な問題だったりして、つまり問いの立てかたが間違っているのである。正しい問題を発見できれば、それはもう問題を解いたも同然である、と偉い人が言っている（らしい）。ただし、問題を発見するのは時間がかかる。だから、すぐに解きたい問題はこういう場を持ってこないほうがいいか

もしれない。我々はプロジェクトそのものを問題のほうへすり合わせるというやりかたでもって、いくばくかの時間を得ることができた。問題を発見するのに時間がかかりそうなときは、枠組み自体を変えてしまうというのがおすすめの方法のひとつだ。ただしそれは問題を早期に解決するよりも面倒なやりかただし、いかにも茨の道だ。それでもやってみたいという奇特な方のために、こうした決めかたをするにあたり、大切だと思われることを少しでも少しだけ記しておきたい。

ここでメソッドとしてもっとも大切なことのひとつは、話が脱線したり、あらぬ方向へ進んだときに、無理に話を引き戻さない努力である。そうしてだらだらと話していると、たぶん、人生で迷っている方向とか、あの人の意外な一面が見え隠れしたりして、けっこうおもしろい。もちろん、ある大切な議題があるのだったら、そのことが気がかりでしようがないかもしれないが、ここはひとまず置いておくと場がいいかんじである。何度も言うが、その場合は「だらだらと話す」ために集まったのであり、決してある議題について結論を出すために集まったのではないのだ。さらに言うなら、別にひとつの輪で話す必要もない。話したい話題がちがうときはそとと離れればいいし、まったく別の作業をしていい。話したい。たくさん人数がいるときはたくさんさんの輪ができたりするし、なんとなく輪に入れずに過ごしている人もいる。実を言うと、ある種の人にとってはかなりストレスフ

ルなメソッドでもあるらしい。

唐突に思えるかもしれないが、ここでベテラン枠の須藤が報告会のなかでつぶやいた一言を引用したい。彼は「研究所は組織じゃなくて、社会なんだと思う」と言った。社会とは、しっかりしているようでいて、実はひどく緩いつながりによって成り立っている。研究所もそのようなものだったかもしれない。社会であるからには、働こうとしても働けない人や、ものをつくっている人やつくっていない人、ひたすら興味を求めている人や、まるで何にも関心がないかのように見える人など、本当にさまざまな人たちがいる。それらを肯定するでもなく、否定するでもなく、やっぱり社会というものはただなんとなくそこにあって、彼らは何を信じていようがお構いなしに先へと進んでいくのであった。そう考えると、東京の片隅に小さな社会を出現させたこのプロジェクトは、社会の隅と隅にいる交わりような人間同士に、ある種の疑似的な接続を行っていたらしい。それはつまり対話とも言いきれない、だが想像をつねに超える対話のかたちであり、たんにだらだら話していたということ以上には意義があったと捉えられるべきである。いや、より正確に言えば、それはまさにたんなる雑談ではあったのだが、たんなる雑談の潜在的効果を再発見するに至ったと言えるのではないだろうか。